

主 題：パトモス島での幻3

聖書箇所：黙示録 1章16節

それではどうぞ黙示録1：16をごらんください。

パトモス島にいたヨハネは、このメッセージを七つの教会に送るようにと主イエス・キリストから幻を受けました。ヨハネはその時、聞こえた声の主はだれなのかと振り向きました。すると、そこに「人の子のような方」がいたと。そしてその方がどういう方なのかをヨハネは私たちに教えてくれています。我々はその8つの直喩のうち既に5つを見て来ました。

3) 人の子・主イエスに関する8つの直喩

- (1) 主の衣服 13節：主は尊厳、名誉にふさわしい王なるお方
- (2) 主の頭髮 14節：主は永遠に存在し、また完全にきよいお方
- (3) 主の目 14節：主は全能のお方
- (4) 主の足 15節：主は教会を治めるお方
- (5) 主の声 15節：主はこの世の最高の権威者であるお方
- (6) 主の右手 16節：主は保護者であり、教会の支配者であるお方

そして16節を見ると6番目に「また、右手に七つの星を持ち」と出て来ます。この「右手」というのは、左手でもよかったけれども、右手と書いたというのではなく、「右手」は神様の力や活動、支配を象徴するものとして使われます。後ろを振り返った時、ここであえてその「右手」に、力あるその御手に「七つの星を持」っておられる方を見たヨハネは言っています。そのことから少なくとも二つのことが考えられます。ヨハネはこのメッセージをもって、迫害下にある七つの教会のクリスチャンたちを励まそうとしていました。このメッセージも実は彼らにとって大きな励ましとなるわけです。

① 主なる神の守り

まずこのことが私たちに教える一つ目のことは、主なる神様がすべてを守っておられるということです。旧約において信仰者たちは主の約束を信じて生きました。例えばベテルというところで神と相撲を取ったヤコブの話の思い出してください。ヤコブに対して主は創世記28：15で「わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」と言っておられます。大変大きな励ましです。また詩篇の著者もこの神様のすばらしい約束をしっかりと信じて生きていました。詩篇91：11には「まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。」、また詩篇23：4にも「死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。」とあります。みことばは神を愛する人たちに対して、あなたたちは心配しなくていい、私があなたの神だから、私があなたたちを守るからと繰り返し教えます。皆さんも愛しておられるイザヤ41：10のみことばが何度も繰り返します。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」と。全能なる神様が、どんなことでもおできになる神があなたを守ってくれます。

こうして幾つかのみことばを見て来ましたが、この右の手、神様の全能の力をもって守ってくださること、その力をもって神様が保護してくださることを約束しています。ですから、その当時の迫害下にあったクリスチャンたちにも、神様が我々を守ってくださっているというその約束が大きな励ましをもたらしたでしょう。今の私たちも今のあなたも全く同じ約束をいただいています。感謝なことに信仰者というのは、どこにしようと神があなたとともにいて、ちゃんとあなたを守ってくださる。そのような約束を神様からいただいた者として、それが初代教会であろうと、21世紀の今のこの日本の私たちの教会であろうと同じことが言えます。神は私を守ってくださると。

レオン・モリスという神学者は七つの教会の御使いたちを「右手」に持っているというのは、鍾愛と保護を示していると言います。まさに今私たちが16節に見る「右手に七つの星を持」つというのは、神様の鍾愛——神様の大変な愛、また神の守りというものを示していると語っています。これを見た時に我々はまず神様の守りということを見ることが出来ます。

② 主なる神の支配

二つ目に主なる神様の支配を意味します。神がすべてを支配しておられるということです。なぜ保護だけではなく、神の支配ということが言えるのかというと、この箇所をよく見ると、主は「七つの星を持」っているとあります。つまり「右手」に持つということは、「七つの星」との関係性を指しているように思えます。ヨハネが見た人の子イエス・キリストという方は、この星を支配しておられ、もちろん神で

あるゆえにこの世界のすべてのものを支配しておられます。そして、キリストがお建てになった教会も
しかりです。ですから16節のみことばを通して、人の子であるイエス様とこの「七つの星」との関係を
見た時に、この方がその「七つの星」を支配しておられるということをヨハネは言わんとしています。

◎ 「七つの星」とは？

この「七つの星」は20節に「七つの星は七つの教会の御使いたち」と説明されています。実はここで使わ
れている「御使い」ということばは、確かに新約聖書の中で「天使」に使われています。例えば主イエス・
キリストの誕生、またヨハネの誕生に関して天使がその知らせを告げに来ました。ルカ1：19を見る
と、「御使いは答えて言った。『私は神の御前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この喜びのおとずれを伝
えるように遣わされているのです。』」とあります。このメッセージをヨハネの父親ザカリヤに対して語りま
した。今黙示録の中で我々が見ている「御使い」と訳されていることばは、確かにルカの福音書の中では
「御使い」＝天使と訳されています。またマタイ1：20でもイエス様の誕生に関して「主の使いが夢に
現われて……恐れないうあなたに妻マリヤを迎えなさい。」というメッセージをヨセフに告げたのも「主の使
い」と教えます。ですから、この「御使いたち」というのは確かに天使と訳されていることばでもあります。
でもだからと言って、このヨハネの黙示録1：16に出て来る「七つの星」とは「七つの教会の御使い
たち」だと説明する時のこの「御使い」が天使のことなのかというと、どうもそうではありません。なぜ
そう言い切れるかというと、天使たちは教会を支配していないからです。天使たちは教会のリーダーで
はないからです。もしそうなら我々は天使と話をしなければならぬ。天使から知恵をもらわなければ
いけない。ですからそのことから考えて、確かにこのことばはあるところでは天使と訳されてはいます
が、少なくともここではそれ以外の意味で使われているであろうと我々は思うわけです。

確かに、この「御使いたち」ということばには、使いとか使者という意味があります。例えばルカ7：
24で「ヨハネの使いが帰って」来たと書かれています。ヨハネのバプテスマの使いの話です。ヨハネの
バプテスマからイエスのもとに遣わされた者たち、この「使い」も「御使い」と同じことばが使われてい
ます。またルカ9：52でも「ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリヤ人の町にはいり、イエ
スのために準備した。」と書かれています。そこの「使いを出」したというのも同じことばです。またヤコ
ブ2：25の中で旧約の人物、遊女ラハブの話が出て来ます。スパイがやって来た時に、ラハブは彼ら
を迎え入れました。そこにはその時の出来事を「同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ」と表現して
います。ここで使われている「使者」ということばも今我々が見ていることばです。ですから、この「御
使い」と訳されていることばは、天使を指す場合と人間の使い、使者を指す場合の両方に使われることば
だということです。この黙示録の中で使われているのは、天使でなければ当然人の話です。この「星」
というのが教会と関連していることから、教会の特にリーダーたちのことを指すのだろうと言われます。
ムーディ聖書学院でも労をなされたある先生は「聖書において星とは、権威やリーダーシップを持って
いる人のことだ」と言います。またグレースのジョン・マッカーサー先生も「これは特に教会の長老た
ち、牧師たちの中のリーダーを指しているのだろう」と言っています。シカゴのムーディ教会の牧師で
もあったある先生は、「恐らく牧師たちのことであろう」と。

そうすると、この「七つの星」を持っている「七つの教会の」リーダーたちを主は支配しておられる。つま
りここで教会というのは主のものであると言っているのです。教会の中でリーダーを選ぶ時の手順を思
い出してください。その人たちはいつも主のみこころを求めて、神様のみことばに従って物事を考え、
物事を判断し、物事を進めて行く者たちです。なぜ教会の中で主のみこころが必要かというと、これは
神の教会だからです。この方が聖書で教えてくださることに従うのが私たちの責任です。教会は誰か個
人に属するものではありません。人間のものではない、神のものなのです。そこでこの主に関してヨハ
ネはこの方は「右手に七つの星を持」っている、七つの教会を、その教会のリーダーたちを治めておられ
るというわけです。

それを考えた時に、教会の使命が何であるかもはっきりします。教会というのが神の持ち物であるな
らば、当然その持ち主である神様の栄光を現わすことです。教会のリーダーたち、神が支配しておられ
るリーダーたちに望まれることは、その人たちは神の栄光のために生きている人たちであり、その人た
ちは神の栄光をいつも考えていると。そういう意味で、この6つ目に出て来た、主は「右手に七つの星を
持」っているというのは、主が保護者であり、すべてを守られる方であり、そして教会の支配者である
方だとヨハネは教えています。あなたを守り、そして主イエス・キリストの血潮をもって買い取ってく
ださったキリストの教会を支配しておられる。そういうことを考えると、ますます私たちは神様のおこ
とばにしっかりと根を下ろして学ぶことが必要だということがわかります。人間の話などどうでもいい、
人間の考えなどどうでもいいのです。私たちが知りたいことは、神がこの聖書を通して何を教えようと
しておられるのか、何が神のメッセージなのかです。

(7) 主の口 16節：主は教会を守られるお方

7つ目は16節「口からは鋭い両刃の剣が出ており、」と、ヨハネが人の子イエス様をこのようなことばで説明しました。ここで使われている「剣」というのは、ローマ兵が戦いで使った武器のことです。彼らは長い剣ではなくて、短い剣を持って戦いました。ですからここで言われていることは、その戦いと関係があります。敵に対して戦いを挑むために使った「剣」、主はご自分の敵に対して戦われるのだと教えています。そして、ここにもまた旧約のイメージが使われています。イザヤ49：2の中に「主は私の口を鋭い剣のようにし、」とあります。またイザヤ11：4には「口のむちで国を打ち、」と記されています。神様のことばをあたかも「剣」のように武器として使うと言われます。

この「口からは鋭い両刃の剣」というみことばを聞くと、ヘブル4：12のみことばを思い出されるかもしれません。「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」と、よく似た表現が使われています。つまりヘブル書の著者はそのように神のことばは働くのだと、神様のおことばがなす働き のわざを言うわけです。ですからどうもここでヨハネが記している主の働きというのは、神様のことばと関連したものであると。どうもヨハネは神様のことばが持つ力や働きを「剣」ということばを象徴として説明しているように思えます。

① 神のことばの働き

神のことばに関してですが、少し先の2章、ペルガモにある教会へのメッセージを見ていただくと、今私たちが見ているようなことが記されています。12節からこのペルガモの教会に対するメッセージが記されていますが、16節「だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」とあります。今我々が見ている1：16節のことばと非常に似通った表現がされています。どうしてこの戦いがここに記されているのか——。その戦いの理由が黙示2：13－15に出て来ます。13節にこの教会には「サタンの王座がある」のだと教えています。また14節には「あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。」、15節にも「あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。」とあります。つまり教会の中に惑わす者たちや偽りの教えを信じ伝える者たち、にせ教師たちがいました。この人々の教えによって、教会のすべての人々が惑わされていたかという、実はそうではなかったのです。ではここで神様が何を言われているかという、イエス様の教会におけるいろいろな働きの話をしているわけです。確かにそういった誤った教えにみんなが惑わされていたとするならば、そこが責められなければいけない。でもこの教会が責められたのはそこではなかったのです。この教会が責められたのは、そういった誤った教えを説く人たちを教会が放置していたことなのです。この人々の罪を責めて、彼らが悔い改めに進むようにしなかったことを責められたのです。つまりこの教会では教会戒規が行なわれなかったのです。彼らの罪を放置するのではなくて、彼らの過ちを明らかにして彼らの罪を責めなさいと言われているのです。そうしなければ主ご自身が彼らをさばくとイエス様は言われた。ご自分の大切な教会にいろいろな誤った教えを持って入り込んで来た人々に対するさばきは確かに聖書が教えています。しかし、このペルガモ教会の問題点は、「あなたたちは間違っている、あなたがたは間違った教えを伝えている」と彼らの罪を責めることがなかったことです。

パウロがそれに似たことを1コリント5：9－13で教えています。「：9 私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。：10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。：11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。」。クリスチャンだと言いながら、神様に逆らっている人たち、そのような生き方を行なっている人たちと交わってはいけないと言うのです。なぜか——。彼らの生き方が間違っているということを彼らに悟らせるためにです。パウロは続けて「：12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。：13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」と言います。

どの時代でも教会が抱える問題は同じです。教会の誕生以来、教会は同じ闘いを続けています。教会の中にさまざまな誤った教えを持って来る者たちがいるのです。使徒20：29－30でも「：29 私が発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。：30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」とパウロが教えています。パウロの時代も実際にそういうことが起こっていた。このトルコの七つの教会でも同じ問題が起こっていた。キリスト教の歴史を振り返ると、同じことが起こり続けているのです。よい種が蒔かれたら、必ず悪い種が蒔かれるのです。神の働きをしようとする時にそれを妨げる働きが必ず起こって来るのです。このペルガモの教会の問題点はそういった悪い働き人、正しくないことを教

える人たちを放置していたことだと、それをイエス様はお責めになるのです。

教会の中に入り込んでくる、そういった悪、彼らは大々的に偽り、また異端とわかった教えを持ち込むことはしません。巧妙な手口をもって、教会の中に悪をもたらせています。例えば教会の中に入ってきて、教会のだれかの偽ったうわさを広め、そのことを通して教会の中に不一致や不調和をもたしたり、うそによって人々を惑わせたり、またある人の評判を落とそうとしたり、悪意をもってうわさを流したり。また、聖書的でない集いや会合に誘うことで惑わすかもしれません。彼らの目的は神の栄光を現わすことではありません。悲しいことですけれども、かえってサタンの目的を果たそうとするのです。ですから主は私たちに何を命じておられるのか——。そのような誤った教えが入って来たり、誤った行ないで教会の中にさまざまな罪をもたしたり、教会の中に分裂をもたしてしまうといったことがあるならば、そういった人たちに対して罪を責めなければならない。つまり教会というのは戒規というものを行なうところなのです。冷たく思われるかもしれませんが、みことばが教えているように、教会というのは教会が主に属するように、教会の中に罪があればその罪を正し、罪を犯している人たちがその罪から悔い改めるように働かなければならないところです。もし彼らが悔い改めなければ、神様が彼らをおさばきになると。そのさばきを神はみことばをもってなされると言うのです。

② 最後の審判 黙示 20 : 12

皆さんもよく覚えておられると思いますが、黙示録 20 章に最後の審判の話が出て来ます。大きな白い御座のさばきに立つのはすべてイエス・キリストの救いを拒んだ者たちです。この救いに与らなかった者たち、罪の赦しをいただかなかったすべての人たちがその大きな白い御座のさばきに立つのですが、その時に数々の書物が開かれ、その中の一つについてこのように記されています。黙示 20 : 12 「死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。」とあります。つまりさばきの座で神様が言われたそのおことばをもってさばきを下すということです。

もちろんまだ聞いておられない方もたくさんおられますが、多くの人々は主イエス・キリストの福音のメッセージを何らかの形で聞いています。たとえそのメッセージを聞いていなくても神がお造りになった自然界は、創造主なる神がいることを明らかに示してくださっています。神のみことばを聞いた人たちはそこに責任が生じます。聞いたメッセージを受け入れるのかどうかです。多くの人たちは自分の意思をもってそのメッセージを拒んでいます。神のさばきの座に立った時、神が語られたメッセージが再びその場で明らかにされるのです。そしてその人々がそのメッセージを聞いていながら受け入れることをしなかったことが明らかにされます。神様が言われるように、神は神のことばをもってさばきをなさると。神のさばきの座に立つ時に、人々は神が言われたことはことごとく正しかったことに気づきます。聞いた時にはそれをすべて否定したけれども、神の前に立った時に実はそのメッセージが真実であったことに彼らは気づかされるのです。神が言われたことが真実であり、イエス・キリストによって罪の赦しが与えられることが真実だったのです。この救いを拒むならば、その人たちに待っているのは永遠の地獄であることが真実だったのだと。こうして神はみことばをもって人々をさばくのです。

この黙示録に記された「口からは鋭い両刃の剣が出て」いる神の教会の中にあって、主イエス・キリストはどんな働きをなさるのか——。イエス様は教会をきよく保つために教会を守られるのです。だから先ほども見たように教会は神様のことばを語り続けて行くことが必要なのです。なぜなら神はみことばをもって神ご自身のみわざをなされるからです。例えば教会の中で、毎週長い時間座って聖書が何を言っているかを聞くのはある人たちにとっては苦痛でしょう。みことばはそれぞれひとりひとりの心の中に働いて、不思議なみわざをなすからです。みことばは我々ひとりひとりの心の中にある間違った部分を示し、あなたに迫ってくださる。そうすると、罪が責められることを嫌がる人たちは、段々耐えられなくなって、そういう場から身を引いて行きます。神がみことばを使って皆さんの心に働いて、あなたが変えられなければならないことを示してくださるからです。でもここにおられる皆さんは、それが示された時に、「主よ、そのとおりです、私を変えてください」、「あなたのみことばに従って私を変え、あなたに喜ばれる人に私を変えて行ってください」と、きっとそういう祈りをもってみことばを聞き、みことばを受け入れ、みことばに従おうとしておられると思います。だから主はあなたの心の中に働いてみわざをなしてくださる。神が愛されている教会です。ご自分の命と引き換えに私たちを罪の束縛から永遠の滅びから救い出してくださった。この教会が常に神の栄光を現わすものであり続けること、当然それが神のみこころであることは言うまでもありません。そのために神は、そういった誤った教えから教会を守って行かれます。そういった人たちに対するさばきを与えると言うのです。しかし、それはすべて神のわざかという、見て来たように我々自身にも教会自身にも大きな責任があります。主が教会から罪を除いて行くように、我々もその命令をいただいた者として、罪を犯している兄弟たちに対して正

しくないことを悔い改めるように勧めて行く責任があります。主イエス様は教会から悪を除くことによって、教会を守って行くという働きをなさるのだということ、こうして敵と戦うのだということを16節が教えています。

(8) 主の顔 16節：主は栄光に満ちあふれたお方

そして最後8番目に出て来るのは16節の最後のところに「顔は強く照り輝く太陽のようであった。」とあります。「強く」と日本語で訳されていることばは非常に興味深いことばが使われています。「強く」というのはただ強いという意味ではなく、最大限に強い、最高に強いということです。最高の輝き、これ以上ない輝きという意味を持ったことばです。ですから、これは太陽がその“最大の”強さで輝いているようであったという意味になります。考えられないような輝きを持った方、それが神だと。

パウロがより多くのクリスチャンたちを迫害しようとダマスコに向かっていった時に、彼は主イエス・キリストに出会います。そのことについて彼はアグリッパ王様の前で証をしています。アグリッパと総督のフェストはこのユダヤを治めていた人物です。アグリッパ王様の前でパウロはこう言いました。ダマスコに向かって行くその途中、ちょうど正午ごろ「王よ、私は天からの光を見ました。」——イエス様の話です。「それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。」と、パウロは出会った復活の主のことを説明しました。

神について、ヨハネもⅠヨハネ1：5で「神は光であって、神のうちには暗いところがない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」と言っています。あの太陽よりも輝いていて、あの太陽よりも明るい存在だと。この黙示録を記しているヨハネはイエス様の御顔が太陽のように輝くのをかつて実際に目撃したことがありました。あの山上の変貌の話です。高い山に登った時に、ヨハネとヤコブとペテロ、三人の前で主の御姿が変わりました。マタイ17：2「御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。」と書いてあります。ヨハネは黙示録を記した時から約65年前に、そのことを目撃しているのです。そして今約65年後に再びこの栄光の主を目撃するのです。まさにあの時お供していた主イエスは正真正銘の神であればと。今見て来たようにヨハネ自身が神とは光だと言いました。まだ若かりしころ、ヨハネはあの山の上でイエス様の御姿が変わり、太陽のように輝いたのを見たのです。そして今、年老いた彼の前にその太陽よりも明るく輝くイエス様を見るのです。ですから最後にこの方は神だ、主は栄光に満ちあふれたお方だと言うのです。

この8つのことが振り返った時に見たイエス様の姿だったのです。このメッセージを迫害されているクリスチャンたちに送るのです。今私たちはこの8つのことを見て来ましたが、ここに示されているイエス様、まさにその方を人々が見上げる時に、たとえどのような迫害を経験しようとする勝利を得ることができると。今まで我々が失敗して来たことを振り返ってみて共通していることは、どうしていいかわからなくてパニックになった時に、神様のところに行くのではなくて、神以外のところに答えを見出そうとしていました。ヨハネは、今あなたたちが経験しているその迫害がどんなに辛くても、それに勝利することはできると言っているのです。そのためには、私たちの主がどのような神なのかをしっかりと覚えなければいけないと。なぜなら私たちが神を見上げるというのは、ただ漠然と上の方に顔を上げるということではなく、この方が私たちに、そして私にどんな約束を与えてくださっているのか——。聖書が示しているこの約束は、一体誰の約束であり、何を約束されたのか——。それを覚える時に私たちはたとえどのようなことを経験しようとする勝利することができる。この神が勝利をくださる、神が希望を下さるのだと。そのためには信仰者である私たちはしっかりと神の約束に立たなければいけない。私たちの神がどんな神なのかを思い出すことです。

信仰というのは、この主なる神と主なる神様の約束に信頼することです。どうしてあなたは自分が救われていると信じることができます？それは罪を悔い改めて主イエスの救いを信じる者に罪の赦しを与えられるという神の約束を信じているからです。私たちの信仰というのは神が言われたことを信じるのです。こうすればあなたの罪が赦されると神が言われたメッセージを心から受け入れて、その方を信じるのです。ですからイエス様を信じた人が毎日のいろいろな罪を経験する中にあって、私は情けない、私は弱い存在だ、ひょっとしたら私は救われていないのではないかと神の約束を疑い続けることは罪なのです。主によってあなたが生まれ変わったら、あなたに必ず変化が出ます。その変化はあなた自身が罪を憎む者になるのです。神を愛する者に生まれ変わります。だから罪に対して悩むのです。神を悲しませている自分自身を悩むのです。その現状を見て自分の救いを疑ってしまう。それは不信仰なのです。もし疑うのだったら神の約束に立てばいい。主イエス・キリストを信じる者を神様は救ってくださいました。そして私を生まれ変わらせてくださり、新しくしてくださり、新しい価値観を持ち、新しい目標を持ち、この神に喜ばれる者として生きて行きたい、そのような人生が始まったのです。なぜか——。生まれ変わったからです。神が救ってくださいましたからです。確かに罪との葛藤はあります。しかし我々信仰者はその中にあって、神がこのことを約束してくださったゆえに私は信じるのだという信仰をもって主に従

い続けて行くのです。それが信仰です。

主の約束に立って生きる、その約束は必ず守られる、真実な主に信頼を置いて生きるのです。ぜひしっかりと覚えてください。神はどんな約束をあなたに与えて下さったのか——。ぜひ覚えてください、どんな神がその約束をあなたに与えて下さったのか——。それを見上げる時に、それを覚える時に、私たちは希望を持って、確信を持って生きることができるのです。その時に、さまざまな問題に対して、問題はすぐになくならずとも勝利を持って生きることができる。そんなふうに生きようと主は私たちに命じておられるのです。どうぞ信仰者の皆さん、そのように歩んでください。それが主が私たちに望んでおられることです。

《考えましょう》

1. ヨハネは、8つの直喩をもって、主イエスがどのようなお方なのかを説明しました。きょう学んだところから、主イエスがどのようなお方かをあなたのことばで説明してください。
2. 「主イエスは、あなたの守りの主である」と言われた主は、あなたがどのように生きることを望んでおられると思いますか？
3. 「罪を犯している兄弟が悔い改めるように、愛をもって責めなさい」と、聖書は教えますが、このことが大切なのはどうしてかを説明してください。
4. あなたは日々どのようにして「試練」に打ち勝っておられますか？どなたかと一緒になって、お互いの秘訣を証しし合ってください。